第五七三回　六月一九日（水）

清代における家族生活と契約

東洋文庫研究員
お茶の水女子大学名誉教授　岸本美緒

前回の山本英史氏の講演で紹介された『中国近世法制史料読解ハンドブック』において、筆者は「契約文書」の章を担当した。中国における契約文書の起源は紀元前にさかのぼることができ、敦煌・トルファン文書のなかにも三世紀から一〇世紀に至る数百件の契約文書が残存する。宋代（一〇～一三世紀）頃からほぼ定形的な書式ができ、不動産の売買契約をはじめ、小作関係、金銭貸借、業務請負、人身売買、合資経営、財産分割など、生活の多様な方面で契約が作成された。前掲書では、土地売買文書、家屋典売文書、典妻（妻の質入れ）文書、投主（身売り）文書、分家書、合股（合資経営）文書、の六種を取り上げて読解を行ったが、本講演では、特に契約の背後にある家族の特質に焦点を当て、①分家書、②典妻文書、③土地売買文書、の三点を取り上げ、関連するテーマの小説とペアにする形で紹介を行った。小説はむろんフィクションではあるが、契約に対する当時の人々の考え方、感じ方を、やや極端ではあれ、生き生きと示してくれるからである。

分家書に関しては、「康熙十一年（一六七二）休寧呉国樹等立『天字鬮書』」（『徽州千年契約文書　清・民国編』第四巻）前書き部分の読解を行い、あわせて明末の馮夢龍『醒世恒言』第二巻「三孝廉譲産立高名」から、話の枕として置かれた紫荊花（すおうの花）の故事（六世紀の『続斉諧記』に基づく）を紹介した。中国の相続制度の特徴は、男子均分相続であること、しかも財産を事前に均等に分割して籤を引くといった方法に見られるような均等性の重視にある。その分割の結果を財産目録として示し関係者が合意して署名したものが分家書である。当該分家書では、「河流が長くなれば百の支流に分かれ、木が大きくなれば多くの枝が競って茂る」として、一族の繁栄を川の流れや木の枝に例え、皆の合意のもと公平な財産分割が行われれば「財産は分割されても義は常に存し、枝は盛んになっても本はいよいよ固く、代々永遠に栄えることができるだろう」と述べている。即ち、生計を分離して個々の家に自由に経営させると同時に、一族としての団結が強調されているのであって、分家に際してはそうした遠心力と求心力とが同時に意識されていた。紫荊花の故事は、父の遺訓を守って生計を共にしていた田氏の三兄弟が、一人の嫁の主張に引きずられて分家を決め、庭先の紫荊樹を木材にして三分しようとしたところ、切り倒す前に紫荊樹は枯れてしまう。そ

れを見た三兄弟は「樹木ですら同根の枝が分かれることに耐えられないのに、父母を同じくする兄弟が分かれてよいものか」と嘆いて、分家を取りやめる、という話である。その話の最後に付された「紫荊花下説三田、人合人離花亦然、同気連枝原不解、家中莫聴婦人言」という詩では、兄弟を「同気の連枝」に例えるとともに、「家中にては婦人の言を聴くなかれ」としている。この故事では、他家から嫁いで「気」を同じくしない妻の分家主張が、一族の結合に対する遠心力として働いたとして、「婦人の言」を一家の団結に対する潜在的な脅威と捉えているのである。

典妻文書としては、「万暦三十九年（一六一一）朱周典妻文書」（『徽州千年契約文書　宋・元・明編』第三巻）の読解を行い、あわせて民国期の柔石の有名な小説「為奴隷的母親」（一九三〇）を紹介した。妻を売る或いは質に入れる行為は法律で禁止されていたが、貧困階層の間ではかなり広範に見られた風習であった。「売妻、典妻、租妻（妻の賃貸）」といった語に見られるように、これらの行為は不動産売買との類比で捉えられており、文書の様式も不動産売買と共通の点が多い。妻の質入れの場合、質入れ先で生まれた子は質入れ先の子となり、一定期間後に妻は元の家に戻るが、不動産の質入れと異なり代価の払い戻しは無い。柔石の「為奴隷的母親」は旧社会の暗黒を描いた代表的な小説の一つとされるが、元の夫のもとに置いてきた子供と、質取り主の家で生んだ子供との間で心の引き裂かれる女性の苦しみを描いている。貧しい夫に勝手に質入れされ、泣く泣く子供と別れて生員の家に入った女主人公は、生員の期待通り男の子を生むが、生員の妻に冷遇され、赤ん坊の母として扱ってもらえない。期限が来て彼女が元の家に帰った時、元の家に置いてきた子供は既に彼女の顔を忘れていた、という悲劇である。ただ、女性をもっぱら旧制度の犠牲者として描く民国期のこれらの小説と異なり、裁判資料などを用いた近年の研究では、女性の側が生存戦略として売妻を積極的に利用する場合もあったことが指摘されており、講演ではその例としてマシュー・ソマー氏の著書を紹介した。

最後に、寡婦が売り手となっている土地売買文書「道光十六年（一八三六）嘉興県陸門金氏杜絶売契」（東京大学東洋文化研究所所蔵）を例示し、あわせて実話に基づく明末の小説「徐老僕義憤成家」（馮夢龍『醒世恒言』所収）の概要を紹介した。この小説は、財産分割で不利な分け前を押し付けられた寡婦を助けて忠義な奴僕が活躍し、主家のため巨富を築く話で、土地売買の際に宴会を開いて契約書を書く様子などが、生き生きと描かれている。